

禪門寶藏錄卷中

諸講歸伏門二十五則 海東沙門 天頌 撰

〔二六〕 西山亮座主

西山亮座主、講得二十四本經論。一日去訪馬祖。祖問曰、聞說大德甚講得經論、將什麼講。主云、將心講。祖曰、心如工伎兒、意如和伎者、爭解講得經論。主云、心既講不得、莫是虛空講得麼。祖曰、却是虛空講得。主拂袖而出。祖召、座主。主迴首。祖云、是什麼。主於是大悟、便伸禮謝。歸寺謂衆曰、我一生功夫、將謂無人過得、今日被馬祖一問、平生功夫、氷釋而已。

傳燈錄

\*

西山亮座主、二十四本經論を講得す。一日去つて馬祖を訪う。祖問うて曰く、「聞説く、大徳は甚だ經論を講得すと、什麼を將て講ずや」。主云く、「心を將て講ず」。祖曰く、「心は工伎兒の如く、意は和伎者の如し、争でか解く經論を講じ得ん」。主云く、「心既に講じ得ざるに、是れ虚空の講じ得る莫きや」。祖曰く、「却つて是れ虚空講じ得たり」。主、袖を拂つて出づ。祖召ぶ、「座主」。主、首を迴らす。祖云く、「是れ什麼ぞ」。主、是に於て大悟し、便ち禮謝を伸ぶ。寺に歸りて衆に謂いて曰く、「我が一生の功夫、將に人の過ぎ得るもの無きと謂えり、今日馬祖の一問を被むり、平生の功夫、氷釋し已れり」。

傳燈錄

\*

西山の亮座主は、経論の講釈が得意で、そのレパートリーは二十四本。

ある日、馬祖のところにおしかけた。

祖がきいた。承れば貴公、経論の講釈が得意とナ。いったい何で講釈するのか。

主 心で講釈いたしまする。

祖 心は主演者、意はワキのようなもの。心がどうして、経論を講釈したりできるものか。

主 心が講釈できぬからには、まさか虚空が、講釈するわけでも（ありますまい）。

祖 虚空の方が、（ちゃんと）講釈する。

主は席を蹴って出てゆく。

「座主よ」と、祖がよぶ。

主は、ふりかえった。

祖 どうした。

主はここで、ハッと気付いて、わびをのべた。

（主は）寺にかえつて、学生たちに言うのに、俺は一生、（講釈に）年期をいれたつもりで、俺の上にする奴など、ないとばかりおもっていたのに、今日という今日、馬祖に一言きかれただけで、長年の年期が、氷のように積りてしまったワ。

\*

○西山亮座主（蜀）出身であり、江西南昌の大安寺の座主であったこと以外は不詳である。西山は学徒を散じて後に隠れた山で、南昌近郊にあり、道教の一大拠点として知られる。この話頭を録するものとして、『祖堂集』卷一四・馬祖章、『伝灯録』卷八、『宗門統要集』卷三、『正法眼蔵』卷三、『聯灯会要』卷五、『禪門拈頌集』卷八、『五灯会元』卷四、『南泉語要』、『法眼語録』、『馬祖語録』等がある。

○二十四本經論（『祖堂集』は六十本經論、『南泉語要』は三十二本經論、『禪門拈頌集』が二十四本經論とする。他は本数を記さぬ。講僧として一家を構えていた自負がうかがえる。

○馬祖（七〇九―七八八）。權德輿（七五九―八一八）撰『洪州開元寺石門道一禪師塔碑銘并序』（『唐文粹』六四、『權載之文集』二八、『全唐文』五〇二）、『宋高僧伝』卷一〇が伝記に関する基本資料であり、宗密（七八〇―八四二）の『円覚經大疏鈔』第三之下、『中華伝心地禪門師資承襲図』がそれを補うものとなる。また『祖堂集』卷一四、『伝灯録』卷六、卷二八に略伝と問答語句を録す。諱は道一、徳陽（四川省徳陽県）の出身。幼くして漢州什方県（四川省）の羅漢寺で出家し、資州唐和尚（六六五―七三二）、六六九―七三六、金和尚（新羅無相、六八四―七六二）に学び、渝州（四川省）円律師に受具した。その後、益州長松山（四川省）、荊州明月山（湖北省）などで山居修行していたが、南岳の懷讓禪師（六七七―七四四）の事を伝え聞いて赴き、機縁が契った。恐らく七四〇年前後のことである。石頭（七〇〇―七九二）が南岳に入るのと入れ替わるように山を下り、天寶元年（七四二）建陽仏跡巖（福建省建陽）で教化の第一歩を踏み出した。天寶二年（七四三）には撫州西裏山（江西省臨川県）に移り、十年ほどして更に虔州龔公山（江西省南康県）に移住した。その頃、裴諱（七一九―七九三）の帰依を受け、馬祖の門は活発化する。大曆四年

(七六九) 洪州開元寺に入り、江西觀察使の路嗣恭の景慕するところとなり、修行者が雲集した。晩年には石門山泐潭寺(江西省靖安県)に住したらしい。貞元四年二月入寂、春秋八十、僧夏六十(『宋高僧伝』は五十)。元和中に大寂禪師と謚された。馬祖の語本といわれるものが古くからあったらしいが伝わらぬ。その一部と思われるものが、『宗鏡録』卷一、卷一四、『伝灯録』卷二八に存す。北宋に入つて四代(馬祖・百丈・黄檗・臨濟)の語録を集めた『四家録』なるものが作られたことが、元豊八年(一〇八五)の日付を持つ楊傑の序によつて確認される。明末の再編になるものを覆刻した慶安版『四家語録』が存す。入矢義高編『馬祖の語録』(禪文化研究所、一九八四年)は、『四家語録』所収の『馬祖語録』とそれに収められていない馬祖に関する機縁を各種の文献から集めて補遺としたものの訳注である。一九六六年に江西省靖安県宝峰寺馬祖禪師大莊嚴塔地宮内より舍利石函題記が出土した。その全文は次の通りである。「維唐貞元七年歲次辛未七月庚申朔十七日景子、故大師道一和尚黃金舍利建塔于此地。大師貞元四年二月一日入滅。時洪州刺史李兼、建昌縣令李啓、石門法林寺門人等記」(陳柏泉「馬祖禪師石函題記與張宗演天師壙記」『文史』第十四輯、一九八二年)。

○心如工伎兒、意如和伎者 四卷本『楞伽經』卷四では「心爲工伎兒、意如和伎者」に作り、十卷本の卷七では「心如巧伎兒、意如狡猾者」に作る。唐訳の七卷本『大乘入楞伽經』卷五の偈句が馬祖の引く訳文と一致する。その偈を示すと次のようである。

甚深如來藏 而與七識俱 甚深の如來藏、七識と俱なり

執著二種生 了知則遠離 執著せば二種生じ、了知すれば則ち遠離す

無始習所熏 如像現於心 無始より習いて熏ぜられ、像の心に現るるが如し

若能如實觀 境相悉無有 若し能く如実に觀ぜば、境相悉く有る無し

如愚見指月 觀指不觀月 愚は月を指さすを見るも、指を觀て月を觀ざるが如し

計著文字者 不見我真實 文字に計著する者は 我が眞實を見ず

心如工伎兒 意如和伎者 心は工伎兒の如く 意は和伎者の如し

五識爲伴侶 妄想觀伎衆 五識が伴侶と爲り 妄想して伎衆を觀る (T一六—六二〇a)

『楞伽經』で説かれる心は集起心(citta)のこと、薰習して種子を貯藏し、未來に諸法を起こすもので、阿羅耶識を意味する。意は末那識、思惟する働きのこと。識を転依した本來の心(自性清淨心)とは同体異質のもの。『楞伽經』を引いて座主の「心」を否定する馬祖のねらいはどこにあるのか。馬祖の立場における心は、「心心不異」「無心」「少法の得べきなき」一心である。座主が「心で説く」と答えた心は、「心上に更に生じた心」(入矢義高訳『伝心法要』七頁)即ち「有心」であり、「心生則種々法生」(『楞伽經』『楞嚴經』『大乘起信論』)といわれる心であることを感じ取ってそれを驗証しようとするものだろう。

○却是虛空講得 馬祖における心の立場を虛空に喩える。馬祖はいう、「此の心は、虛空と壽を齊しくし、乃至六道に輪迴して種種の形を受くとも、即ち此の心は未だ曾て生ずること有らず、未だ曾て滅すること有らず」(『馬祖の語録』一九八頁)。

また西天第七祖婆須蜜の伝法偈、「心は虛空界に同じくして、虛空に等しき法を示す」。『大般若經』卷二九一「著不著相品」に、「甚深般若波羅蜜多を學ばんと欲せば、まさに虛空の如く學ぶべし」とあるように、虛空はまた「法として如來が阿耨多羅三藐三菩提を得るもの有る無し」(『金剛經』、岩波本九二頁)、「法として説くべきもの無し」(同一〇六頁)、「少法の得べきもの有る無し」(同、一〇八頁)ということの喩えでもある。

即ち「虛空講得」とは、具体的には「終日説くも何ぞ曾て説かん、終日聞くも、何ぞ曾て聞かん。所以に釋迦は四

十九年説くも、未だ曾て一字をも説著せず」（入矢義高訳『宛陵録』一一八頁、もとは『注維摩經』弟子品、T三八―三四七bによる）ということであろう。

○是什麼<sup>レ</sup>呼ばれて振り返った、そいつは誰だ、そいつは何だ。そこに講得して授受すべき法が介在するか。馬祖に始まる接化の手段。百丈・雪峰等に受け継がれる。

○氷釋<sup>レ</sup>氷が溶けることから転じて、心にある物事（妄念）が迹形も残らず消え去ること。『伝灯録』卷二五・天台徳韶章、「僧問う、如何か是れ曹源の一滴水。淨慧曰く、是れ曹源の一滴水。僧惘然として退く。師、坐側に於て、豁然と開悟し、平生の凝滯、渙として氷釋するが若し」（T五一―四〇七a）。もと『老子』第五章、「古の善く士爲たる者は、微妙玄通、深くして識る可からず。夫れ唯だ識る可からず。故に強いて之が容を爲さん。豫兮として冬に川を渉るが若く、猶兮として四鄰を畏るるが若く、儼兮として其れ客たるが若く、渙兮として氷の將に釋くるが若し」による。

○出典について<sup>レ</sup>『伝灯録』と記される。いま東禪寺版『伝灯録』を挙げると次のようである。

亮座主〔隱洪州西山〕、本蜀人也。頗講經論。因參馬祖。祖問曰、見説座主大講得經論、是否。亮云、不敢。祖云、將什麼講。亮云、將心講。祖云、心如工伎兒、意如和伎者、爭解講得經。師抗聲云、心既講不得、虚空莫講得麼。祖云、却是虚空講得。師不肯、便出、將下塔。祖召云、座主。師迴首。祖云、是什麼。亮豁然大悟、禮拜。祖云、這鈍根阿師、禮拜作麼。亮歸寺、告衆云、某甲所講經論、謂無人及得、今日被馬大師一問、平生功夫、氷釋而已。乃隱西山、更無消息。（禪文化研究所影印本二二三頁下）（傍線は『宝蔵録』と一致する箇所、〔 〕は伝灯

録の割注）

以上のようにあまりよく一致しない。しかし『禪門拈頌集』卷八・西山亮座主章とはよく一致する。『禪門拈頌集』

をベースにして異同を示すと次のようになる。

西山亮座主、講得二十四本經論。一日去訪馬祖。祖問曰、聞說大德甚講得經論、是否。主云、不敢。祖云、將什麼講。主云、將心講。祖曰、心如工伎兒、意如和伎者、爭解講他經論。主云、心既講不得、莫是虛空講得麼。祖云、却是虛空講得。主拂袖而出。祖召、座主。主迴首。祖云、是什麼。主於是大悟、便伸禮謝。祖云、者鈍根阿師、禮拜作什麼。主直得遍體汗流。歸寺謂衆曰、我一生功夫、將謂無人過得、今日被馬祖一問、平生功夫、冰釋而已。後乃罷講、直入西山、杳無消息。（『高麗大藏經』第四六卷補遺Ⅲ、一三〇頁）

大字は『禪門拈頌集』と『禪門寶藏錄』の文字が共通するもの、小字は『禪門拈頌集』にのみ見えるもの。  
①他||得（宝蔵）      ②云||曰（宝蔵）      ③冰||氷（宝蔵）

この様に『禪門拈頌集』と『宝蔵錄』の違いはきわめて少ない。このことから、『宝蔵錄』は、出典を『伝灯録』と記しているが、編者が見ていたのは、『禪門拈頌集』であると断定してもよいと思われる。

### 〔二七〕 良遂座主

壽州良遂座主、初參麻谷。谷見來、乃將鋤頭去、鋤草。主到鋤草處。谷都不顧。便歸方丈、閉却門。主却來敲門。谷曰、阿誰。主曰、良遂。纔稱名、忽爾契悟曰、和尚莫謾良遂、良遂若不來禮拜和尚、泊被經論賺過一生。及歸講肆云、諸人知處、良遂恁知、良遂知處、諸人不知。

\*

壽州の良遂座主、初めて麻谷に參ず。谷、來たるを見て、乃ち鋤頭すきを將もちて去り、草を鋤すく。主、草を鋤く處に到る。谷、都て顧みず。便ち方丈に歸り、門を閉却す。主、却來して門を敲く。谷曰く、「阿誰だれぞ」。主曰く、「良遂」。纔かに名を稱するや、忽爾に契悟して曰く、「和尚は良遂を謾あやする莫し、良遂若し來たつて和尚を禮拜せずんば、泊んど經論に一生を賺過されんとせり」。講肆に歸るに及んで云く、「諸人の知る處、良遂惣て知る、良遂の知る處、諸人知らず」。

\*

壽州の良遂座主が、はじめて麻谷に參じた(とき)、谷は來たなとみるや、鋤で草を刈にゆく。

主は(谷が)草を刈っている處に、やってくる。谷は全然、ふりむかず、そのまま方丈に入つて、門をしめ切つた。主は引きかえして、門をたたいた。

谷 誰だ。

主 良遂です。

名のるや否や、(遂は)ハッと氣付いた。

曰く、和尚さまは、良遂をうら切らなんだ、良遂はもし、和尚さまを拝みに來なんだら、すんでのところ、一生を經論にかれてしまふところでした。

(遂は) 教場にかえつて言うには、諸君が学んだものは、良遂がすべて(先に)学んだもの、良遂が学んだものは、君たち何も学んでいない。



\*

○良遂座主＝麻谷とのこの機縁によって開悟し、講席と決別したこと以外は不詳。寿州は安徽省壽県。『伝灯録』卷九（T五二―二六〇a）、『雲門広録』卷中（T四七―五五七c）、『汾陽語録』卷中（T四七―六一三a）、『宗門統要』卷四（『宗門統要統集』卷六、縮藏雲一〇―八）、『正法眼蔵』卷五（Z二―八一六四a）、『聯灯会要』卷七（Z一三六―二七八c）、『禪門拈頌集』卷一三、『五灯会元』卷四（Z一三八―七二b）等にこの話が録されている。

○麻谷＝麻谷宝徹（生没年不詳）。『祖堂集』卷二五、『伝灯録』卷七に本伝があり、他に『祖堂集』卷三の慧忠章、卷四の丹霞草、卷一七の嵩岩山聖住寺無染章、『伝灯録』卷五の慧忠章、卷七の三角山総印章、卷八の南泉章、卷九の良遂章、卷一三の耽源山真応章にこの人の話が散見する。また『臨濟録』にも麻谷との話を録し、『宗門統要』卷三や『聯灯会要』卷四には、『祖堂集』『伝灯録』にない話を多く録している。諱は宝徹、姓氏は未詳、馬祖に嗣ぐ。丹霞天然と共に遊行して、蒲州（山西省永濟県）の麻谷山を通りかかり、丹霞と別れて、そのままそこに住した。この人の話としては、どの禪師の所へ行っても、その禪牀を三回巡ってから振錫して立つという手段で相手をとめたことや、「風性常住」の話が、道元の『正法眼蔵』現成公案に引かれて有名である。法嗣に良遂禪師、新羅無染国師がいる（『馬祖の語録』六六頁参照）。

○鋤草＝除草をはじめたのは、座主だと見抜いた上でのこと。お前が身につけている葛藤の言語（講経論）を放棄せよという示唆。

○方丈＝『伝灯録』卷六・百丈章の禪門規式にいう、「長老既に化主と爲らば即ち方丈に處る。淨名の室おに同じ、私寢の室には非ず」。また『祖庭事苑』卷六にいう、「今、禪林の正寢を以て方丈と爲す。蓋し則を毘耶離城の維摩

の室に取る。一丈の室を以て能く三萬二千の師子の座を容る。不可思議の妙事有るが故なり。唐の王玄策、西域に使いし、其の居を過ぐるに、手版を以て縦横に之を量りて十笏なるを得たるが爲に、因りて以て名と爲す」と。王玄策のことは『法苑珠林』卷二九・感通篇（T五四一五〇一c）に見える。道忠撰『禪林象器箋』卷一、殿堂類上の方丈の項に詳しい。

○閉却門門は法門の門であり、經典の注釈。それをぴしゃりと遮断した。また僧が来るのを見て門を閉ざすのは禪僧が僧をテストする常套手段でもあった。『伝灯録』卷二五・徳山章、「師見僧來乃閉門。其僧敲門。師曰、阿誰。曰、師子兒。師乃開門。僧禮拜。師便騎項曰、這畜生什麼處去來」（T五一―三一八a）。同卷一〇・甘贄行者章、「雪峯和尚來。甘閉門召云、請和尚入。雪峯隔離掉過納衣。甘便開門禮拜」（T五一―二七九b）。同卷一二・陳尊宿章、「師尋常或見納僧來即閉門。或見講僧、乃召云、坐主。其僧應諾。師云、擔板漢。或云、遮裏有桶與我取水」（T五一―二九一b）。

○契悟開悟にほほ同じ。ここは、自己の本源に目覚めたこと。『聯灯会要』卷四・百文章、「師侍馬大師、游山次、忽見野鴨飛過。祖問、是甚麼。師云、野鴨子。祖云、甚麼處去也。師云、飛過去也。祖搗師鼻頭。師負痛失聲云、阿耶耶、阿耶耶。祖云、又道飛過去也。師於此契悟、浹背汗流」（Z一三六―二四七b）。

○和尚莫謾良遂「和尚は私をバカにしなかつた」とは、「ちゃんと私を導いてくれた」という報恩の言葉。

○泊幾・幾合・泊合とも。あやうく、すんでのところ。

○賺過だまされつばなし、あざむかれつばなし。『仏国録』普說、「向黑山鬼窟賺過一生」（T八〇―二七六c）。

○講肆市中の諸処に設けられた仏典講釈と談義說法のための公開教室。古くは『梁高僧伝』卷四・支遁伝に見える。

『統高僧伝』卷九・慧弼伝、「天嘉元年、遊諸講肆」（T五〇―四九五a）。入矢義高『龐居士語録』（『禪の語録

7) 一八三頁に詳しい。

○出典について良遂と麻谷が問答するのは、『宝蔵録』では鋤草の日と同じ日のこととして扱われているが、最初の注に挙げた諸資料では『禪門拈頌集』以外は、次の日のこととするか三日後のこととしている。いま『禪門拈頌集』をベースにして、その異同を示すと次のようである。

壽州良遂禪師<sup>①</sup>、初參麻谷。谷見來、乃將鋤頭去、鋤草。師到鋤草處。谷都不顧。便歸方丈、閉却門。師却來敲門。谷曰、阿誰。師曰、良遂。才稱名、忽爾契悟曰、和尚莫瞞良遂、良遂若不來禮拜和尚、洎被經論賺過一生。及歸講肆、開演有云、諸人知處、良遂恁知、良遂知處、諸人不知。(『高麗大藏經』卷四六、二二五頁)

大字は『拈頌集』と『宝蔵録』の文字が同じであり、小字は『拈頌集』にあつて『宝蔵録』にないもの。

①禪師||座主(宝蔵)

②師||主(宝蔵)

③才||纔(宝蔵)

④瞞||謾(宝蔵)

嘉靖十年智異山鐵窟開刊の『宝蔵録』は出典を『伝灯録』とする。そこで高麗本『伝灯録』を示すと次のようである。

壽州良遂禪師、參麻谷。谷見來、便將鋤頭去、鋤草。師到鋤草處。谷殊不顧。便歸方丈、閉却門。師次日復去。谷又閉門。師乃敲門。谷問、阿誰。師曰、良遂。纔稱名、忽然契悟曰、和尚莫謾良遂、良遂若不來禮拜和尚、洎被經論賺過一生。谷便開門相見。及歸講肆請衆曰、諸人知處、良遂恁知、良遂知處、諸人不知。(『禪学叢書之六』四一六頁下)(傍線は『宝蔵録』に一致する箇所)

以上のように『禪門拈頌集』の方がよく一致する。この則も出典は『拈頌集』と見てよいであろう。因みに北宋版・南宋版等の『伝灯録』では、

壽州良遂禪師。初參麻谷。麻谷召曰、良遂。師應諾。如是三召三應。麻谷曰、這鈍根阿師。師方省悟、乃曰、和

尚莫謾良遂、若不來禮拜和尚、幾空過一生。麻谷可之。（禪文化研究所影印本一四三頁上、『禪學叢書之六』八〇頁上）  
 となつており、良遂が契悟するに至る経緯を異にしている。

〔二八〕 大原孚上座

大原孚爲座主時、在楊州孝先寺、講涅槃經。有禪者、阻雪聽講。至廣談法身妙理、禪者失笑。孚曰、某甲依經解義、適蒙見笑、且望見教。禪者曰、實笑座主不識法身。孚曰、何處不是。禪者曰、請座主更說一遍。孚曰、法身之理、猶若大虛、豎窮三際、横亘十方、隨緣赴感、靡不周遍。禪者曰、不道座主說不是、只說得法身量邊事、實未識法身在。孚曰、請禪客當爲我說。禪者曰、暫輟講、於夜中靜慮、善惡諸緣、一時放却。孚依教、從初夜至五更、聞鼓角聲、忽然契悟。

\*

大原孚、座主爲りし時、楊州孝先寺に在りて、涅槃經を講ず。禪者有りて、雪に阻まれ講を聽く。法身の妙理を廣く談るに至りて、禪者失笑す。孚曰く、「某甲は經に依りて義を解するに、適いま笑わるるを蒙る、且く教えられんことを望む」。禪者曰く、「實に座主の法身を識らざるを笑うなり」。孚曰く、「何の處か不是なる」。禪者曰く、「座主更に説くこと一遍せんことを請う」。孚曰く、「法身の理は猶お大虚の若し、豎に三際を窮め、横に十方に亘る、縁に隨い感に赴き、周遍せざるは靡なし」。禪者曰く、「座主の説くは、不是とは道わず、只だ法身量邊の事を説き得

たるのみ、實には未だ法身を識らざる在」。孚曰く、「請う禪客、當に我が爲に説くべし」。禪者曰く、「暫く講を輟め、夜中に靜慮し、善惡の諸縁、一時に放却せよ」。孚、教えに依りて初夜より五更に至るに、鼓角の聲を聞き、忽然と契悟す。

\*

大原の孚は、經典の学者であつた。そのころ、楊州孝先寺に足をとめ、涅槃經を講じていた。ある禪僧が、雪に足をとられて、講義をうけた。法身という（仏法の）深い道理を、さかんにのべたるところで、禪僧はふきだした。

孚 それがしはテキスト通り、法義を説き明かしている。先ほどお笑い召されたわけを、是非ともお示しください。

禪 学者が法身を見とどけていないのが、まことにおかしい。

孚 何処がいかんのか。

禪 どうか学者、もういちど、あらためてくりかえされよ。

孚 法身という深い道理は、あたかも太虚のように、時間的には過去より未来にわたり、空間的には十方にひろがって、相手次第に感應道交するゆえに、行きわたらざるところがない……。

禪 学者の説明が、いかんとは申さぬ。ただ法身の外まわりを、うまく説明しただけのこと。肝心の法身を見とどけてござらんわいな。

孚 禪の論客よ、どうか一つ、私に説いてください。

禪 講義をいったん中止し、夜つびいて坐つて考えよ。善い悪いという価値感を、一挙に放りだすのだ。

孚は言われた通り、夕方から夜明け時までくると、時報の太鼓と角笛が、耳に入ったとたん、突如、ぴたりと思ひあつた。

\*

○大原孚フ山西省太原（陽曲県）の出身で、雪峰義存に嗣ぎ、出世することがなかつた。機峰の峻烈なるをもつて知られ孚上座と称された。詳しい伝記は不明。なお『宗門統要集』は、趙州の法嗣に名を列している。機縁の語句は、『伝灯録』卷一九、『聯灯会要』卷二四、『五灯会元』卷七等に出づ。

○楊州孝先寺フ不詳。楊（揚）州は江蘇省江都県。『碧巖録』九九則の本評、『聯灯会要』『五灯会元』は光孝寺とする。『仏祖統紀』卷四七、高宗の紹興九年（一一三九）に、勅して天下の州郡に報恩光孝禪寺を立てたことが見える。

○阻雪フすぐに念頭に浮かぶのは、徳山を辞去した雪峰と巖頭が澧州の鼈山の鎮まちに着いたとき雪に阻まれ、しばらく足止めをくらい、巖頭は毎日打睡、雪峰は一向ひたすらに坐禪、疑念を起した雪峰が巖頭の導きで成道したという鼈山成道の話（『雪峰語録』卷上）であり、法眼が雨で川の水かさが増し、暫く地藏院に止住したために桂琛との機縁が契つたという話（『伝灯録』卷二四・法眼章）である。

○法身妙理フ法身の理法の不可思議さ。『統高僧伝』卷八・釈曇延伝、「仏性妙理は涅槃の宗極爲り」（T五〇―四八八a）。

○禪者失笑フこれもすぐに念頭に浮かぶのは、夾山が道吾の指示で船子に参じた話である。『宗門統要』卷七の華亭

船子章によつて示すと次のようである。

秀州華亭船子徳誠禪師。因に夾山初めて潤州京口に住す。時に道吾到るに上堂に遇う。有る僧問う、「如何なるか是れ法身」。云く、「法身は無相」。「如何なるか是れ法眼」。云く、「法眼は無瑕」。道吾覺えず失笑す。夾山纔かに見て便ち下座し、道吾を請じて問う、「某甲適來僧に祇對せし話は、必ず是ならざる有りて、上座に失笑さるるを致す、望むらくは上座慈悲を恠まざらんことを」。吾云く、「和尚一おなじ等く是れ出世するも、未だ師有らざる在らん」。夾云く、「某甲甚處か是ならず、望むらくは爲に説破せられよ」。吾云く、「某甲終に説かず、請う和尚却つて秀州華亭船子の處に往き去れ」。云云。(東洋文庫所藏宋版本、卷七の二十四丁)

○依經解義Ⅱ『仏説像法決疑經』、「像法中、諸惡比丘、我が意を解さず、己が所見に執して十二部經を宣説し、文に依りて義を取り、決定の説を作す。当に此の人は三世諸佛の怨かたきにして、速に我が法を滅せんことを知るべし」(T八五—一三三七a)。『伝灯録』卷六・百文章、「問う、經に依りて義を解するは三世の佛の怨、經の一字をも離るれば魔説に同じきが如し、如何。師云く、固く動靜を守るは三世の佛の怨、此の外に別に求むるは即ち魔説に同じ」(T五—一二五〇a)。

○大虚Ⅱ天空・虚空の意。『伝灯録』卷六・仏光如滿章、「法身は虚空に等しく、未だ曾て生滅有らず」(T五—二四九a)。『信心銘』、「圓なること太虚に同じ、欠無く餘無し」(T五—四四七a)。

○豎窮三際……Ⅱ時空を超えていること。澄觀『華嚴經疏』卷一五、「初句は横に十方を盡し、次句は豎に三際を窮む」(T三五—六一二c)。『五灯会元』一一・大愚守芝章、「上堂。豎に三際を窮め、横に十方に徧ねし、拈起するや帝釋の心驚き、放下するや地神の膽おの戦く、不拈不放ならば、喚んで甚麼なんと作す」(Z二三八—二五b)。○隨縁赴感……Ⅱ新訳(八十卷)『華嚴經』卷六の偈句、「佛身充滿於法界、普現一切衆生前。隨縁赴感靡不周、而

恆處此菩提座」(T一〇一三〇a)。瑞鹿本先禪師は、この偈句を引いて次のように示衆している。

師、衆に示して云く、「佛身は法界に充滿し、一切羣生の前に普現し、縁に隨い感に赴いて周ねかざる靡くして、常に此の菩提の座に處ると。若し佛身は法界に充滿し去ると道わば、菩薩界・緣覺界・聲聞界・天界・修羅界・人界・畜生界・餓鬼地獄界、是の如き等の界は應に須らく蹤跡有るを勿くし去つて始めて得し。爲什麼に此の二三の説有り。法界は唯だ是れ佛身なりと道わんが爲に便ち恁麼に道う。恁麼に道うも既に二三と成れば、又た作麼生か是れ法界に充滿する底の佛身と説く。這裏に向いて你等の爲に亂道す、還た得きや。這箇の説話に於て若也し薦得せば、心力を省くを妨げず。若也し薦し得ずんば、你等且く道え、僧祇を歴ずして法身を獲るは是れ箇の甚人ぞ。彼此浴を出でて勞倦たり、且く退くを妨げず」(『伝灯録』卷二六、T五一—四二六b)。

○法身量邊事 法身のカテゴリー、概念。『雲門広録』下、「疎山衆に示して云く、老僧は咸通年已前、法身邊の事を會得し、咸通年已後、法身上事を會得す」(T四七—五七四a)。

○善惡諸縁…… 妄念を起す一切の善惡の攀縁をほうりだしてとりあわぬこと。神会『南陽和上頓教解脱禪門直了性壇語』、「知識よ、一切の善惡、總て思量する莫れ」(胡適本二二六頁)。「伝灯録」卷五・慧能章、「汝若し心要を知らんと欲せば、但だ一切の善惡、都て思量する莫れ、自然に清淨なる心體に入るを得ん」(T五一—二三六a)。「宗鏡録」卷一、「洪州馬祖大師云く、……内外の善惡の諸法を念わず」。黄檗『伝心法要』にも、「六祖云く、暫時念を斂め、善惡都て思量する莫れ」(『禪の語録』八五頁)。

○鼓角 太鼓と角笛。軍隊で時報や号令に用いられる。杜甫〈閣夜詩〉、「五更の鼓角 聲悲壯、三峽の星河 影動 搖」(『唐詩選』卷五)。

○出典について 智異山鐵窟開刊本は出典を『伝灯録』とするが、『伝灯録』には本則を録さぬ。『正法眼蔵』卷五



(Z二一八一六一a)、『碧巖録』四七則の本評(T四八一八三a)、同九九則の本評(T四八一三三c)、『聯灯会要』卷二四(Z二三六一四二二b)、『禪門拈頌集』卷二五(高麗大藏經卷四六)、『五灯会元』卷七(Z二三八一—三五a)、『頌古聯珠通集』卷三二(Z二一五一—二〇三b)等に見られる。この中で典拠と見られるものは『禪門拈頌集』である。いま『拈頌集』をベースにしてその異同を示すと次のようである。

大原孚上座<sup>①</sup>在楊州孝先寺、講涅槃經。有禪者、阻雪聽講。至廣談法身妙理、禪者失笑。孚曰、某甲依文<sup>②</sup>解義、適蒙見笑、且望見教。禪者曰、實笑座主不識法身。孚曰、何處不是。禪者曰、請座主更說一徧<sup>③</sup>。孚曰、法身之理、猶若大虛、豎窮三際、橫亘十方、隨緣赴感、靡不周徧<sup>④</sup>。禪者曰、不道座主說不是、只說得法身量邊事、實未識法身在。孚曰、請禪德<sup>⑤</sup>當爲我說。禪者曰、暫輟講、於室中靜慮、善惡諸緣、一時放却。孚依教、從初夜至五更、聞鼓角聲、忽然契悟。(『高麗大藏經』卷四六、四二〇頁)

- ①上座∥爲座主時(宝蔵) ②文∥經(宝蔵) ③徧∥徧(宝蔵) ④德∥客(宝蔵) ⑤室∥夜(宝蔵)

## 〔二一九〕印宗法師

印宗法師、於法性寺、講涅槃經。能大師寓止廊廡間。暮夜風颺利幡。聞二僧對論、一云幡動、一云風動、往復酬答、曾未契理。師直以風幡非動、動自心耳。印宗竊聆此語、悚然異之。翌日邀師入室、徵風幡之義。師具以理告之。印宗執弟子之禮、請受禪要。

\*

印宗法師、法性寺に於て、涅槃經を講ず。能大師、廊廡の間に寓止す。暮夜、風、刹幡を颯あぐ。二僧の對論を聞くに、一は幡動くと云い、一は風動くと云い、往復酬答して、曾て未だ理に契わず。師は直に「風幡動くに非ず、動くは自心のみ」を以てす。印宗、竊かに此の語を聆き、悚然として之を異とす。翌日、師を邀むかえて室に入れ、風幡の義を徴とむ。師は具に理を以て之を告ぐ。印宗、弟子の禮を執り、禪要を請受す。

\*

印宗法師は法性寺で、涅槃經を講義した。能大師は廊下のあたりに、身を寄せていた。夜に入つて、説教のしるし旗を、風があふりあげた。僧が二人、論じあうのが耳に入った。一人は「旗が動いている」といい、他の一人は「風が動いている」といって、おたがいに言いはるだけで、仲々かみ合わぬ。

能大師はずばりと言つてのけた、風も旗も動いていない、動いているのは、めいめいの心にすぎん。

印宗はこつそりと、この言葉をきくと、ゾツとするほど感じ入つた。次の日、大師を迎えて入室させ、風と旗のこゝとをただした。大師はくわしく、道理を説いた。印宗は弟子の礼をとり、願つて禅仏教の、核のところを授かつた。

\*

○印宗法師〓六二七―七二三。王師乾なる人の塔銘があつたが現存しない。それに依つた『宋高僧伝』卷四が第一資料となる。

釋印宗。姓は印氏、吳郡の人なり。母の劉氏、始めて娠むにあたり、隣家戚な一沙門の端雅なるものの徐歩して印の舎に入り、劉に白して「願わくば子と爲らんことを」と曰うを見る。母、此に同じきを夢み、再三陳讓も克わす。父、夢に梅檀の香木の童子を饋られ、跪いて劉に授付こと有り。劉は頓に葷羶を厭い、俗間の食味は脣吻の外に隔在く。生れて長ずるに及んで、師に従いて經典を誦み通る。末に最も精しく講ずるは涅槃經なり。咸亨元年（六七〇）、京都に在りて盛んに道化を揚ぐ。上元中（六七四―六）敕もて大愛敬寺に入りて居らしめんとするも、辭して請に赴かず。斬春東山の忍大師に禪法を諮受す。復た番禺に慧能禪師に遇い、問答の間、深く玄理に詣る。郷地に還るに刺史王胄、禮し重んずること倫に殊なる。請じて戒壇を置き、宗に命じて人を度せしむこと數千百可り。續いて敕もて召されて入内し、乃ち慈氏の大像を造る。著わす所の心要集は梁より起して唐に至る、天下の諸の達者の語言の總録なり。又た敕を奉じ、江東の諸寺院、天柱・報恩に各の戒壇を置き人を度す。又た百家諸儒士の三教の文意に、佛法を表明するものを纂め、重ねて之を結集す。手筆逾よ高く、著述流布す。先天二年（七二三）二月二十一日、示終す。囑して輪王の法に循いて之を葬せしむ。年八十七なり。會稽の王師乾、塔を立てて銘す。（T五〇―七三―b）

『伝灯録』卷五の広州法性寺印宗和尚章（T五一―二四〇a）もこれを受ける。李華の撰する『左溪大師碑』（『全唐文』三三〇）には、左溪玄朗（六七三―七五四）が會稽印宗禪師に就いて律部を商つたことを伝える。また法性寺住師の法才が儀鳳元年（六七六）二月八日、印宗法師による慧能の剃度を記念して、その髪をうずめて建てたという、『光孝寺瘞髮塔記』（『全唐文』九二二、『光孝寺志』第一〇、『廣東通志』卷三二九）があり、また王維撰する『六祖能禪師碑銘』（『全唐文』三三七、『唐文粹』六三三、『初期禪宗史書の研究』五三九頁等）も南海での印宗との出遇いと剃度をいう。『曹溪大師伝』は、風幡問答を聞いて感じ入り、盧行者を房に立寄せ、『涅槃經』の仏性不二の法

について問答が行われている。『初期禅宗史書の研究』（二二五～二二八頁）は印宗について詳しい。

○法性寺Ⅱ『光孝寺志』によると、この寺はもと西漢の南越王の旧宅。三国時代に寺が創建され制旨（止）寺と称し、東晋の時は王園寺、唐の貞観一九年（六四五）に王園寺を改めて乾明法性寺、武后の時に大雲寺となり、会昌の破仏で西雲道宮となったが、大中一三年（八五九）に乾明法性寺に復す。宋の建隆三年（九六二）に乾明禅院と改められ、崇寧二年（一一〇三）には崇寧方寿禅寺、高宗紹興七年（一一三七）報恩広孝禅寺、同二年（一一五二）に報恩光孝寺となる。

『歴代法宝記』『円覚経大疏鈔』では「制止寺」、『曹溪大師伝』『祖堂集』では「制旨寺」とするが、『光孝寺志』によれば、「法性寺」とは時代による名称の違いであり、同じ寺である。しかし、『曹溪大師伝』は、風幡問答及び印宗との問答は制旨寺とし、受戒を法性寺とし、別寺として扱っている。

○風幡非動、動自心耳Ⅱ風幡の話は『光孝寺瘻髮塔記』に「因論風幡話、與宗法師、説無上道」とあるが、風動幡動の対論と、これに対する慧能の語を記すのは『歴代法宝記』（T五二―一八三c）が最初である。いまそれを示す次のようである。

時に印宗、衆人に問う、「汝ら總て風の幡を吹き、上頭に翻動するを見るや」。衆答えて言わく、「動くを見る」。或るひと言わく、「風の動くを見る」。或るひと言わく、「幡の動くを見る」。「是れ幡の動くにあらず、是れ見の動くなり」。是の如く問難して定まらず。惠能、座下に於て立ちて法師に答う、「もてよ自り是れ衆人の妄想心の動と不動とのみ、是れ幡の動くを見るに非ず、法は本と動と不動と有る無し」。法師は説くを聞いて驚愕し、忙然として是れ何の言なるかを知らず。

建中二年（七八二）成立の『曹溪大師伝』は次のようである。

時に囑して正月十五日に幡を懸く。諸人は夜に幡の義を論ず。法師は廊下に壁を隔てて聴く。初めに幡を論ずる者は、「幡は是れ無情、風に因りて動く」と。第二人難じて言わく、「風と幡は俱に是れ無情、如何が動くを得ん」と。第三人、「因縁和合するが故に合に動くべし」と。第四人言わく、「幡は動かさず、風自ら動くのみ」と。衆人諍論し、喧喧として止まず。能大師、高聲に諸人を止めて曰く、「幡は餘種の如く動くこと無し。言う所の動とは、人者の心自ら動くのみ」（『慧能研究』三八頁）。

『宝林伝』卷三の第十七祖僧伽難提章に、弟子の伽耶舍多との間に同じテーマの問答が見える（『禅学叢書之五』六一頁下段）。

この風幡問答についての詳細な考証が『慧能研究』（駒沢大学禅宗史研究会編、一五三―四頁、大修館書店）になされている。その考証中には記されていないが、『天聖広灯録』卷七の六祖慧能章では、風幡を争つた二法師は、慧能の剃髪のために印度からきた者として展開させ、『光孝寺瘞髮塔記』や『曹溪大師伝』と関連付けている。

儀鳳元年丙子正月八日に至りて南海に届り、印宗法師の法性寺に於て、涅槃經を講ずるに遇う。師は二法師の風幡を争うを見る。一人は風動と言ひ、一人は幡動と言ふ。能召して曰く、「是れ風動ならず、是れ幡動ならず、仁者の心動くなり」。二人言下に大悟して曰く、「是れ盧行者なる莫きや、是ならば即ち速に説え」。師曰く、「我は即ち惠能なり」。二法師曰く、「我等は乃ち西天よりして、此の土に來たりて、汝が與に披剃受具せしめんとす。仍ち法性寺に智光律師の戒壇有り。即ち宋朝の求那跋陀三藏の置く所なり」。記に云く。「後に肉身の菩薩有りて此の壇に在りて受戒す」と。又た梁末の眞諦三藏、壇の側に手ずから二菩提樹を植え、記して曰く、「卻後に一百二十年、大士有りて此の樹の下に受具す」と。宛も宿契の如し。二法師曰く、「我れら汝の落髮の師と爲らん。汝は我が得法の師と爲れ」。蓋し風幡の言に感悟するを以てなり。明年二月八日に受具し已る。（Z

一三五—三三三c)

○悚然 Ⅱ 『漢語大詞典』には「惶恐のさま」と「恭敬のさま」の二意を与えている。ここはぞっとして異敬の念を生じたこと。『北齊書』二九・李繪伝、「音辭辯正、風儀都雅、聽者悚然」。『伝灯録』卷一〇・趙州章、「師之玄言、布於天下、時謂趙州門風、皆悚然信伏矣」（T五—二七八b）。

○出典について Ⅱ 風幡問答は、灯史及び『六祖壇經』などの多くの禪文献に見える。嘉靖十年版の『宝蔵録』は、出典を『伝灯録』と明記する。次に東禪寺版『伝灯録』をベースにして異同を示す。

至儀鳳元年丙子正月八日、屈南海。遇印宗法師於法性寺講涅槃經。師<sup>①</sup>寓止廊廡間。暮夜風颺刹幡。聞二僧對論、一云幡動、一云風動、往復齟齬<sup>②</sup>、曾未契理。師曰、可容俗流輒預高論否。直以風幡非動、動自心耳。宗竊聆此語、悚然異之。翌日邀師入室、徵風幡之義。師具以理告<sup>④</sup>。印宗不覺起立云、行者定非常人、師爲是誰。師更無所隱。直敘得法因由。於是宗執弟子之禮、請受禪要。（禪文化研究所影印本六五頁上）

大字は『宝蔵録』と『伝灯録』に共通するもの。小字は『伝灯録』にのみ見えるもの。

①師 Ⅱ 能大師（宝蔵）      ②齟 Ⅱ 齬（宝蔵）      ③（印） 十宗（宝蔵）      ④告 十（之）（宝蔵）

### 〔三二〇〕 無業禪師

無業禪師、爲涅槃般座主之時、問馬大師、三乘文字、粗窮其旨、常聞禪門即心是佛、實未能了。祖曰、只未了底心即是、更無別物。又問、如何是祖師西來密傳心印。祖曰、大德正鬧在、且去別時來。師才出。祖召曰、大德。師迴首。祖云、是甚麼。師便領悟禮拜。

\*

無業禪師、涅槃の座主爲りし時、馬大師に問う、「三乗の文字は粗あらまし其の旨を窮めるも、常に禪門の即心是佛なるを聞くに、實に未だ了了こと能わず」。祖曰く、「只だ未だ了了ざる底の心即ち是れなり、更に別の物無し」。又た問う、「如何なるかはれ祖師西來密傳の心印」。祖曰く、「大徳正に鬧さわがし、且く去つて別時に來たれ」。師才かに出でんとす。祖召びて曰く、「大徳」。師、迴首へりむく。祖云く、「是れ甚麼ぞ」。師便ち領悟し禮拜す。

\*

無業禪師は、涅槃經の専門家であつたとき、馬大師にきいた、（私は）三乗のテキストはひとわたり究明できたつもりです。かねてから禪門では、即心即仏だと承わる。全く以て判りません。

祖 ほかならぬ、（君の）判らんという心が、つまりそれなんだ、そのほかに何かあるわけではない。

さらに、どういふところが、祖師が西のくから来て、ひそかに伝えた心の印ですか。

祖 大徳よ、あわててござる、まあ出直してくることだ。

無業が外に出たとたん、馬祖はよびかけた、大徳よ。

無業は、ふりかえつた。

祖 どうしたのか。

無業は忽ち領解し、（黙って）あたまをさげた。

\*

○無業禪師〓汾州無業禪師（七五九—八二〇）。汾州は山西省西南部の汾陽県。『宋高僧伝』卷一が伝記に関する第一資料。『祖堂集』卷一五、『伝灯録』卷八、卷二八に語句を録す。師の諱は無業、姓は杜氏、商州上洛（陝西省商県）の人で、身長は六尺をこえ、声は大鐘のようであった。九歳のとき、本郡の開元寺志本禪師について、金剛・法華・維摩・思益・華嚴等の經典を学び、秀才ぶりを發揮した。十二歳のとき得度し、講肆（市中の公開教室）に出席した。二十歳、襄州（湖北省襄陽県）の幽律師について具足戒を受け、四分律を学び、衆僧のために涅槃經を講じた。後、馬祖に参じ、この則の問答によって大悟した。尋いで曹溪・廬山・天台等の名山聖跡を遊歴し、洛陽・長安より上党（山西省長治県）に到った。節度使相国李抱真（『旧唐書』一三三）、『新唐書』一三八）、馬燧（『旧唐書』一三四）、『新唐書』一五五）が帰依したが、名利を避け、五台の清凉山に往き、大藏經を読むこと八年、また西河（山西省汾陽県）に到る。州牧董叔纏が請じて、開元寺に住せしめた。以後二十年、この地で化を振った。憲宗皇帝の二度の詔請にも赴かず、穆宗即位の年、その迎請に答えて、「行くことは則ち行かんも、道途恐らくは殊ならん」と言つて、沐浴し、中夜に至つて化した。寿六十二、僧夏四十二。この年、楊潜が碑文を撰したが、今に伝わらない。勅して大達国師と諡さる。生没年に二説がある。『宋高僧伝』の穆宗即位の年とする説と、『隆興仏法編年通論』等の長慶二年（八二二）説とである。穆宗即位の年とするのは、『祖堂集』『景德伝灯録』もそうである。『釈氏疑年録』『禅学大辞典』などはこの年を長慶元年（八二二）としているが、新旧の『唐書』『資治通鑑』などはすべて、穆宗の即位は元和十五年正月丙午の日である。従つてここでは従来の定説は取らず、元和十五年（八二〇）の示寂とする。（『馬祖の語録』七二頁参照）



○即心是佛||即心即仏、是心是仏とも。馬祖によつて語られることで大きな反響を呼んだ句。以後、馬祖禪の代名詞のような役割を荷う。しかし、もともとは、『観無量寿経』に、「是の故に汝等、心に佛を想う時、是の心即ち是れ三十二相八十隨形好にして、是の心佛と作り、是の心是れ佛なり」とある句。神会『禪門直了性壇語』（胡適『神会和尚遺集』二四七頁）、更に宝誌『大乘讚』、傳大士『心王銘』、牛頭慧忠（『宗鏡録』卷九八）、曹溪大師伝、法海（『伝灯録』卷五）、司空山本淨（『伝灯録』卷五）、石頭（『伝灯録』卷一四）にもこの語が見える。

○未了底心即是||馬祖のいう「心」は、日常に働く生身の心のことであり、『観無量寿経』にいうような、仏を想う時の心であるとか、無上の菩提を發す心（『大慧書』「答趙待制」）だとか、無心の心という条件を付けぬ。そこに馬祖禪の本領があり、雜貨鋪といわれて、どのような相手にも対処していく説法の魅力があつた。『宗鏡録』卷一四に引く馬祖の言葉にいう、「汝若し心を識らんと欲せば、祇今語言するもの、即ち是れ汝が心なり。此の心を喚んで佛と作す」（T四八―四九二a）。また『祖堂集』卷一五の大梅章でも、「因に一日問う、如何なるか是れ佛。馬祖云く、即ち汝が心是れなり」（『禅学叢書之四』四一八六）と答えている。しかし一面、このような「心」の無条件の肯定は、そのまま禪に墮落する弊害が大きかつた。「非心非佛」はそのことに対する反措定である。

○祖師西來密傳心印||祖師西來の問いが出現するのは、一心の法を伝える者としての達磨のイメージが馬祖によつて新たに構築されたことによる。『祖堂集』卷三・老安章に、「擔然禪師問う、如何なるか是れ祖師西來の意旨。師曰く、何ぞ自家の意旨を問わずして、他の意旨を問うて什摩と作す」とあるのが最も古いものであるが、馬祖の時代に盛んに西來意が商量された頃の産物であろう（『初期禅宗史書の研究』四三六頁）。「心印」は仏心印とも言い、釈迦牟尼仏より以来、祖師方によつて心から心にくつきりと印で押したように伝持されてきた「心」のこと。

○大徳正闢在||大徳はいま落ち着いておらぬ、一途にムキになっているぞ。それでは私が何を言つても受けとめられ

ぬ、出なおしなさい。「在」は強調の助字であるので訓読しない。『五灯会元』卷二・南陽慧忠章、「上堂。青蘿からみつ黃縁からみつきて、直に寒松の頂に上り、白雲淡泞にして太虚の中に出没す。萬法本と閑なれど人自ら鬧さわがし」(Z二三八—三四a)。「同」卷一四・真歇清了章、「〔丹〕霞問う、如何なるか是れ空劫已前の自己。師、對えんと擬たす。霞曰く、你鬧さわが在、且く去れ」(Z二三八—二六九d)。「伝灯録」卷二九・法眼頌「因僧看經」、「今人、古經を看よみ、心中の鬧なるを免れず。心中の鬧なるを免れんと欲せば、但知古經を看よめ」(T五一—四五四b)。

○是甚麼ニ是什麼。「二六」の注を見よ。

○出典についてニ本則を録すものとしては、『祖堂集』卷一四・馬祖章(『禅学叢書之四』四—四二)と卷一五・無業章(四—九九)、『宗鏡録』卷九八(T四八—九九二c)、『伝灯録』卷八(T五一—二五七a)、『宗門統要』卷三(東洋文庫藏宋版本、卷三の三十七丁)、『正法眼蔵』卷六(Z二一八—六九b)、『宗門聯灯会要』卷五(Z二三六—二五二d)、『五灯会元』卷三(Z二三八—五四c)、『馬祖語録』(Z二一九—四〇七d)などがある。

『馬祖語録』は『伝灯録』『五灯会元』に同じ。『祖堂集』の馬祖章は後半部のみを録し、卷一五の無業章は前半部だけで長い問答を録し、かなり異なる。『宗鏡録』卷九八はほぼ『伝灯録』に同じ。『宗門統要』『聯灯会要』は、二則に分け、それぞれ大悟したことになっている。『正法眼蔵』は後半のみ。智異山鐵窟開刊本は典拠として『伝灯録』と明記している。いま東禅寺版『伝灯録』の該当箇所をベースにして異同を示すと次のようになる。

汾州無業禪師者、商州上洛人也。……十二落髮、二十受具戒於襄州幽律師。習四分律疏、才終便能敷演。每爲衆僧、講涅槃大部、冬夏無廢。後聞馬大師禪門鼎盛、特往瞻禮、馬祖觀其狀貌瓌偉、語音如鍾、乃曰、巍巍佛堂、其中無佛。師禮跪而問曰、三乘文學、粗窮其旨。常聞禪門即心是佛、實未能了。祖曰、只未了底心即是、更無別物。師又問、如何是祖師西來密傳心印。祖曰、大德正鬧在、且去別時來。師才出。祖召曰、大德。師迴首。祖云、是什麼。師便領悟禮拜。祖云、遮鈍漢、禮拜

作麼。(禪文化研究所影印本、一一六頁上)

大字は両者に共通する文字、小字は『伝灯録』にのみ見える文字。

- ①講涅槃大部||爲涅槃座主之時(宝蔵) ②問曰||問馬大師(宝蔵) ③學||字(宝蔵) ④什||甚(宝蔵)

〔三二〕 洪州法達

洪州法達師、來禮六祖、頭不至地。祖呵曰、禮不投地、何如不禮、汝心中必有一物、蘊習何事耶。達曰、念法華經、已及三千部。祖曰、汝但勞勞執念、謂爲功課者、何異螿牛愛尾也。聽吾偈曰。心迷法華轉、心悟轉法華。誦久不明己、與義作讎家。無念念即正、有念念成邪。有無俱不計、長御白牛車。達蒙啓發、踊躍歡喜、以偈讚曰。經誦三千部、曹溪一句亡。未明出世旨、寧歇累生狂。羊鹿牛權說、初中後善揚。誰知火宅內、元是法中王。

\*

洪州法達師、來たりて六祖に禮して、頭地に<sup>つ</sup>至かず。祖呵して曰く、「禮して地に投ぜずんば、何ぞ禮せざるに如かん。汝が心中必ず一物有らん。何の事を蘊習すや」。達曰く、「法華經を<sup>と</sup>念えて、已に三千部に及ぶ」。祖曰く、「汝但だ勞勞として念<sup>と</sup>うに執するを、謂いて功課と爲さば、何ぞ螿牛の尾を愛するに異ならんや。吾が偈に<sup>い</sup>うを聽け」。

心迷えば法華が轉じ、心悟れば法華を轉ず。

誦すること久しくして己を明らめずんば、義と讎<sup>かたき</sup>家と作る。

無念なれば念即ち正しく、有念なれば念は邪と成る。

有無俱に計らず、長つねに白牛車を御す。

達、啓發を蒙り、踊躍歡喜し、偈を以て讚いして曰う。

經誦すること三千部、曹溪の一句に亡ず。

未だ出世の旨を明らめずんば、寧ぞ歇やまん累生の狂。

羊鹿牛は權かりに説き、初も中も後も善く揚ぐ。

誰か知らん火宅の内、元と是れ法中王なることを。

\*

洪州から法達（法）師が来て、六祖を礼拝したが、頭が地についていなかった。

祖が叱りつけた、礼拝して頭を地につけぬなら、礼拝しない方がよい。汝きみはきつと胸の中に、何か一物もっている。いったい何を勉強していたのか。

法華經を読んで、もう三千部に達します。

祖 君が苦しんで読むことにこだわりつけ、それを日々の努力目標とするのは、あたかもヤクが（異性の）尻尾を追うようなものだ。私の詩をきかせてやろう。

心を見失うと、法華が（心を）転ずる、心が目覚めると、法華を（心が）転ずる。

長時間、口を動かして經を読んで、自分が明らかでない、經典の本義にとつて、君はあだ仇にすぎぬ。

読むという分別の無い、無分別の読みは正しいが、読むという分別がある限り、その分別が、邪りをでつちあげ  
る。

有る無しは共にかかわらず、大らかに白牛車をのりまわすのだ。

達は親切な師の言葉に目をひらかれ、おどりがあがって喜んだ。詩でたたえていう、

テキストを口へのぼすこと三千部、曹溪の一言で、その意味を失った。

釈迦の出世本懐を、はつきりみとどけないうちは、狂った生死のくりかえしを、どうして断ち切れよう。

羊と鹿と牛の三車は、仮りそのめのためならば、はじめも途中も、さいごも見事に説けている。

火の手あがる古屋敷の中こそ、本来の法王中の法王なのだ。

\*

○法達〔法〕師〓敦煌本『六祖壇經』に記載される六祖の十大弟子（法海・志誠・法達・智常・志通・志徹・志道・法珍・  
法如・神会）の一人で、七年法華經を誦したが決疑せず、六祖に参じたとされる。『伝灯録』卷五は、洪州豊城の  
人、七歳で出家し、法華經を誦したと、やや詳しく発展した伝を記す。他に敦煌本・惠昕本系・徳異本・宗宝本の  
『六祖壇經』、『聯灯会要』卷二、『五灯会元』卷一の法達章。

○念法華經、已及三千部〓当時の『法華經』読誦の盛行を背景に持つ。「當時に於ける法華一乘の思想、及び『法華  
經』信仰については、北方に一行（六八三―七二七）、楚金（六九八―七五九）、飛錫等の宣教あり、安史の亂後、朔  
方管内教授大徳となつた辯才（七三三―七七八）が國壽を祝つて法華道場を設けたこともあり、南方では、正系の玄

朗や湛然の外にも、法華寺玄儼や、大義、神邕、道遵等が活躍して居り、『宋高僧傳』第二十四以下の讀誦篇、『太平廣記』第百九以下の報應部にも資料がある」（『初期禪宗史書の研究』二七七頁。「念」は誦讀。

○功課は自らに課した毎日の勤め、それが宗教的な功德となると期待するもの。もとは官吏の成績の考査のこと、後に学生の學習課程を指すようになった。『寒山詩』に職業僧を痛烈に罵倒する次の詩がある。

語你出家輩 你出家の輩に語ぐ

何名爲出家 何をか名づけて出家と為すや

奢華求養活 奢華にして養活を求め

繼綴族姓家 族姓の家を繼綴す

美舌甜唇膏 舌に美しとし 唇膏に甜しとし

諂曲心鉤加 諂曲へつらい 心鉤に加わる

終日禮道場 終日 道場に礼し

持經置功課 經いたを持し 功課を置す

鑪燒神佛香 鑪には神仏の香を焼き

打鐘高聲和 鐘を打ちて高声に和す

六時學客春 六時に客春まねを學て

夜夜不得臥 夜夜 臥するを得ず

只爲愛錢財 只だ錢財を愛するが為めに

心中不脫灑 心中に脱灑ならず

見他高道人 他の高道の人を見れば

却嫌誹謗罵 却って嫌いて誹謗して罵る

驢屎比麝香 驢屎を麝香に比す

苦哉佛陀耶 苦なる哉 仏陀耶 (『禪の語録』13 寒山詩) (二七〇)

○犛牛愛尾 犛牛はヤク、その尾は長く美しい。妄執のたとえ。『法華經』方便品の偈に依る。「舍利弗當に知るべし、我れ佛眼を以て觀じ、六道の衆生を見るに、貧窮して福慧無し。人の生死の險道は、相續して苦しみ断えず、深く五欲に著すること、犛牛の尾を愛するが如し」(T九一九b)。

○心迷法華轉、心悟轉法華 敦煌本『六祖壇經』では、「心、行ずれば法華を轉じ、行ぜざれば法華が轉ず。心正なれば法華を轉じ、心邪なれば法華が轉ず。佛知見を開けば、法華を轉じ、衆生の知見を開けば法華に轉ぜらる」(T四八一三四三a)。また『歷代法寶記』に、「法華經を持して史法華と号した二人の兄弟が無住に参じた話があり、「無念なれば史の法華、有念なれば法華の史。無念なれば即ち是れ法華を轉じ、有念ならば即ち是れ法華が轉ず」(T五一一九二a)と、『壇經』とほぼ同じ意を説いている。「轉」は転読の意と手玉に取ると二重に響かせる。

○白牛車 、『法華經』譬喩品に説かれる仏乗の喩え。長者の家の火事(火宅)において、「聲聞は羊車を求めて火宅を出で、緣覺は鹿車を求めて三界を出、菩薩は牛車を求めんとして三界を出た。三界を出おわって無畏無安なところに至るを見て、仏は白牛に駕せられる大車をそれぞれに等しく與えられた」(『仏典講座』7 二四三頁、大藏出版)。

○出世旨 出世の明師(釈迦仏)の説かれた教え。『伝心法要』、「志公云く、出世の明師に逢わずして、枉しく大乘の法薬を服すのみ」(『禪の語録』8 七七頁)。『円覚經大疏鈔』卷二之下にも、志公の語として「無爲大道の快

樂、衆生は脩錯(?) することを解せず。出世の明師に逢わず、未だ大乘の法薬を服さず」(Z一四一―二四七c)。

○累生狂<sub>レ</sub>輪廻を繰り返す迷妄のことだろう。『緇門警訓』卷六「怡山然禪師發願文」、「十纏十使は、積もりて有漏の因と成る。六根六塵は、妄じて無邊の罪と作る。迷いて苦海に淪み、深く邪途に溺る。我に著して人に耽り、枉を擧して直を措<sub>す</sub>つ。累生の業障、一切の愆<sub>あやまち</sub>尤は、三寶を仰いで以て慈悲し、一心を瀝いで懺悔せよ」(T四八一―〇七二c)。

○羊鹿牛權説<sub>レ</sub>声聞乘・縁覺乘・菩薩乘を羊車・鹿車・牛車に喩えたもので方便として設けられた。先の「白牛車」の注を参照。中国仏教では、羊・鹿・牛の三車の牛車と大白牛車(一仏乘)とが同一と見る立場を三車家(三論宗、法相宗)、別と見る立場を四車家(天台宗、華嚴宗)という。智異山鐵窟開刊本は「説」を「設」に作り、典拠と一致する。

○初中後善揚<sub>レ</sub>世尊が挙揚された法は、初めも中ほども終りも、どれも皆な全てすぐれている。『法華経』序品、「爾の時、佛有り、日月燈明如來・應供・正遍知……天人師・佛世尊と号す。正法を演説して、初善・中善・後善なり。其の義は深遠、其の語は巧妙、……中略……説く可き所の法、初中後も善なり」(T九一三c―四a)。

○誰知火宅中、元是法中王<sub>レ</sub>「火宅の中こそが法中王である」とは、『維摩経』菩薩品に「三界是道場」(T一四一五四三a)とあるように、「火宅の三界を離れて悟りがあるのではない」ということだろう。「火宅の内にこそ白牛車がある」。「火宅」は『法華経』譬喩品に言う、「三界は無安、猶お火宅の如し。衆苦充滿して、甚だ怖畏す可し。常に生老、病死の憂患有り。是の如き等の火は、熾然として息まず。如來は已に、三界の火宅を離れ、寂然として閑居し、林野に安處す」(T九一―四c)。「法中王」については「九」の注を見よ。

○出典について<sub>レ</sub>智異山鐵窟開刊本は『伝灯録』と明記する。東禪寺版『伝灯録』をベースにして異同を示すと次の



ようである。

洪州法達禪師者、洪州豐城人也。七歳出家。誦法華經。進具之後、來禮祖師、頭不至地。祖訶曰、禮不投地、何如不禮、汝心中必有一物、蓋習何事耶。師曰、念法華經、已及三千部。祖曰、汝若念至萬部、得其經意、不以爲勝、則與吾偕行。……

(略) ……故云開佛知見。汝但勞勞執念、謂爲功課者、何異犛牛愛尾也。師曰、若然者、但得解義、不勞誦經耶。祖曰、經有何過、豈障汝念。只爲迷悟在人、損益由汝。聽吾偈曰。心迷法華轉、心悟轉法華。誦久不明己、與義作讎家。無念念即

正、有念念成邪。有無俱不計、長御白牛車。師聞偈再啓曰、經云、諸大聲聞乃至菩薩、皆盡思度量、尚不能測於佛智。……

(略) ……祖曰、經意分明、……應知所有珍財、盡屬於汝。由汝受用。更不作父想、亦不作子想、亦無用想。是名持法華經。從劫至劫、手不釋卷、從晝至夜、無不念時也。師既蒙啓發、踊躍歡喜、以偈贊曰。經誦三千部、曹谿一句亡。未明出世旨、寧歇累生狂。羊鹿牛權設、初中後善揚。誰知火宅內、元是法中王。祖曰、汝今後方可名爲念經僧也。師從此領玄旨、亦不輟誦持。

(禪文化研究所影印本、七〇頁)

大字は『宝蔵録』及び『伝灯録』に共通する文字、小字は『伝灯録』のみに存す。

- ① 祖師 || 六祖 (宝蔵)
- ② 訶 || 呵 (宝蔵)
- ③ 蓋 || 蘊 (宝蔵)
- ④ 師 || 達 (宝蔵)
- ⑤ 犛 || 犛 (宝蔵)
- ⑥ 師 || 達 (宝蔵)
- ⑦ 贊 || 讚 (宝蔵)
- ⑧ 谿 || 溪 (宝蔵)
- ⑨ 設 || 説 (宝蔵)

〔三三〕 清凉澄観

清凉鎮國國師澄観、九歳出家、禮寶林體真禪師、周歳通法華維摩楞伽等經。次往常照和尚、傳菩薩戒、奮十願律身。雖行解兼至、猶凝礙未通。遂扣宗門、首謁牛頭六祖、次見徑山國一。時無名禪師、居東都同德寺。師趨其闔丈、親炙

茲事、頓徹玄微、洞明大事。述心要一章云、至道本乎其心、心法本乎無住。云云。

祖燈錄

\*

清涼鎮國師澄觀、九歳にして出家し、寶林體眞禪師を禮し、周歳にして法華・維摩・楞伽等の經に通ず。次いで常照和尚に到り、菩薩戒を傳け、奮つて十願もて身を律す。行解兼ね至ると雖も、猶お凝礙未だ通ぜず。遂に宗門を扣き、首め牛頭六祖に謁し、次いで徑山國一に見ゆ。時に無名禪師、東都の同徳寺に居す。師、其の函丈に趨き、茲の事を親炙し、頓に玄微に徹し、大事を洞明す。心要一章を述べて云く、至道は其の心を本とし、心法は無住を本とす。云云。

祖燈錄

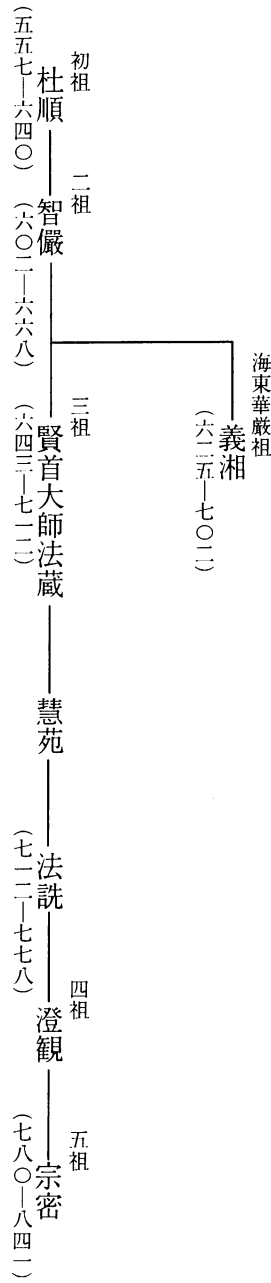
\*

清涼の鎮國師澄觀は、九歳で家庭を離れて、宝林寺の体眞禪師を師とたのみ、一年のうちに法華・維摩・楞伽など、(大乘の)諸経をものにした。引きつづき、常照和尚からボサツ戒を受け、感動して十願を立て、身をひきしめるに至つて、実践と学問は共に完璧というのに、まだ何かわだかまりが吹き切れない。そこで宗門をたずねて、まず牛頭山の六祖(惠忠)に参じ、引きつづいて徑山の国一禪師を師とした。あたかも(南宗神会下の)無名禪師が、東都の同徳寺におられた。澄觀は参じて弟子の礼を尽し、その方法になじんで、一挙に奥儀に達し、あますなく大事をきわめた。

(後に)、要点をのべて言うのに、究極の道は心が根本だ、心というものは、何処にもとどまらないのが、根本だと

\*

○清凉鎮國國師澄觀 〓 七三八—八三九。華嚴宗の第四祖。法系は次のようになる。

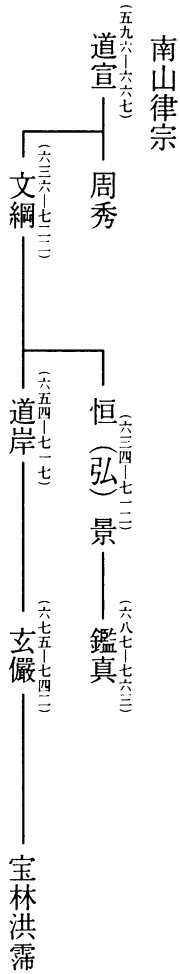


伝記の第一資料は裴休撰『清凉国師妙覺塔記』である。元・普瑞『華嚴懸談会玄記』卷一(Z二二—四a)に全文の引用があり、鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会、一九六五年)図版第三及び一五七頁に結城令聞氏所蔵の拓本が採録されている。同じく裴休撰の『清凉国師碑銘』(『全唐文』七四三三)がある。他には『宋高僧伝』卷五の澄観伝が重要であり、清代のものながら『法界宗五祖略記』(Z一三四)がよくまとまっている。なお澄観の総合的な研究としては前掲の『中国華嚴思想史の研究』がある。

字は大休、俗姓は夏侯氏、越州会稽(浙江省紹興県)の人。九歳(『宋高僧伝』は十一歳)のとき宝林寺に入り、十一歳(『宋伝』は十四歳)のとき得度、至徳二年(七五七)に具足戒を受けた。その後、相部律・南山律・三論・起信

論・涅槃經などを広く学び、洛陽天竺寺の法説から『華嚴經』を、荆溪湛然より天台の教義を学んだ。また牛頭山の慧忠・径山法欽・洛陽の無名大師より南宗禪を、慧雲禪師より北宗禪を受ける。五台山清涼寺にあつて『大方広仏華嚴經疏』六十巻、『大方広仏華嚴經隨疏演義鈔』九十巻を著わした。貞元二年(七九六)、徳宗に召されて入内し、同一五年(七九九)に清涼国師の号を賜わった。代宗・徳宗・順宗・憲宗・穆宗・敬宗・文宗の七帝の門師となり、開成四年(八三九)三月六日示寂す。鎮国国師の号は、崔致遠撰『唐大薦福寺故寺主翻經大徳法藏和尚伝』に「清涼山鎮国沙門澄觀、玄義を疏して云く」(T五〇―二八二a)とあり、『伝灯録』巻三〇に「五台山鎮国大師澄觀答皇太子問心要」(T五―四五九b)と見えるのが資料として古い。『仏祖歴代通載』巻一四では、「十五年(七九九)、清涼は鎮国大師の號を受け、進めて天下大僧録を加えらる」(T四九―六〇九c)とし、同年四月に入内説法し、「清涼を以て國師の號を賜わった」(T四九―六一〇b)とある。これに依れば鎮国は大師号であり、清涼は国師号である。

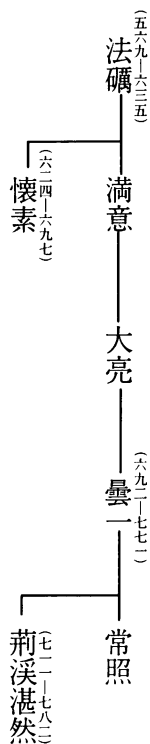
○九歳出家、禮寶林體眞禪師。『妙覺塔記』『釈門正統』巻八(Z一三〇)はこれと同じであるが、『宋高僧伝』は「年甫十一、寶林寺(今應天山)の霈禪師に依りて出家す」とある。體眞禪師については不明。霈禪師については、『宋高僧伝』巻一四・玄儼伝に、門人を記して言う、「有門人法華曇俊・崇默・龍興崇一・開元智符・稱心崇義・香嚴懷節・寶林洪霈・覺引灌頂」(T五〇―七九五c)。このことから霈禪師は南山律を承ける人であり、その法系は次のようになる。



宝林寺については、『浙江通志』卷三三二・寺觀六「紹興府」の条にいう、「唐元徽元年。法師惠基。於寶林山下建。時有皮道與捨宅。連山造寺。山巔石岫。有靈鰻井。旁有巨人跡錫杖泉。唐會昌中廢。乾符元年重建。改爲應天寺。宋崇寧年。詔改崇寧万寿禪寺。又改爲天寧寺。郡寮祝聖於此。紹興年改廣孝。又改光孝。云云」。また『輿地紀勝』卷一〇「紹興府」にも次のようにいう、「應天寺。淮海後集云。寺造於宋元徽中。其地據寶林山巔。南直秦望。北負臥龍。戴山挾其左。鑿湖趨其前。圓視井邑。如閱圖畫。越之形勝。十得六七」。

○常照和尚は相部律を承ける（『宋高僧傳』は南山律の人とする）曇一の弟子の一人として名が見える。『宋高僧傳』卷一四・唐会稽開元寺曇一伝に門人を記していう、「門人越州妙喜寺常照・建法寺清源・湖州龍興寺神玩・宣州隱靜寺道昂・杭州龍興寺義賓・台州國清寺湛然・蘇州開元寺辯秀・潤州棲霞寺昭亮・常州龍興寺法俊等」（T五〇―七七九a）。常照和尚の住した越州妙喜寺は、風幡問答に登場した印宗や弘忍に嗣いだ僧達（『宋高僧傳』二九）が住した処であり、龜山（『大明一統志』卷四五では紹興府城の東南二里に在り、飛來山とも宝林山ともいうとある）に在つたらしい。相部律宗の相承は次のようになる。

相部律宗



但し『宋高僧傳』卷五・澄觀伝では、「乾元中、依潤州棲霞寺醴律師、學相部律、本州依曇一、隸南山律」（T五〇―七七七a）とあり、『妙覺塔記』にも「年満ちて受具し、曇一大師に於て南山の業を繼稟す」（鎌田茂雄『中国

華嚴思想史の研究』一五七頁）とあって、曇一を南山律の人と見ている。

○十願Ⅱ『宋高僧伝』に言う、「門人の清汚、觀の平時の行状を記して云く、觀は恒に十願を發す。一には長に方丈に止まり但だ三衣鉢にして長を畜えず。二には當代の名利は之を棄て遺るが如し。三には目に女人を視ず。四には身影を俗家に落さず。五には未だ執受を捨てず長に法華經を誦せん。六には長に大乘經典を讀み普ねく含靈に施さん。七には長に華嚴大經を講ぜん。八には一生晝も夜も臥せず。九には名を邀め衆を惑わし善を伐らず。十には大慈悲を退かず普ねく法界を救わん。觀は形盡くるの期に逮ぶまで、恒に願に依りて修行す」（T50—七三七c）。『華嚴懸談会玄記』卷一所引の「妙覺塔記」では次のように言う、「常照禪師を禮し、菩薩戒を授く。始めを原ね終を要め、厥の十誓を啓す。體は沙門の表を損なわず。心は如來の制に違わず。坐して法界の經に背かず。性は情礙の境に染まらず。足は尼寺の塵を履まず。脇は居士の搦に觸れず。目は非儀の彩を視ず。舌は午を過ぎての銷を味わず。手は圓明の珠を釋てず。宿して衣鉢の則を離れず」（Z22—四b）。

両文献を比較するとかなり違いがある。「妙覺塔記の十誓は、常照禪師に修學していた時代の自勵のための誓の文であり、宋高僧伝の十願は、澄觀の學問が大成した壯年以後のものと思われる。あるいは後人の附加したものであるかも知れない」（鎌田、前掲書一六二頁）と総括されている。

○行解兼至Ⅱ実践と理論（經典解釈）が二つながら最高に到達すること、しかしまだそれは二つであり、ピタリと一つになっていない。法藏『華嚴一乘教義分齊章』卷三、「初地以上。行解純熟。同證同行。同修同斷」（T45—四九二a）。荷沢大師『顯宗記』、「福德智慧。二種莊嚴。行解相應。方能建立」（T51—四五九b）。また『祖堂集』卷二・達摩章、「明佛心宗。寸無差悞。行解相應。名之曰祖」（『禪學叢書之四』三八頁上段）。但し、「行解相應」は行と解がピタリと一つになっていること。

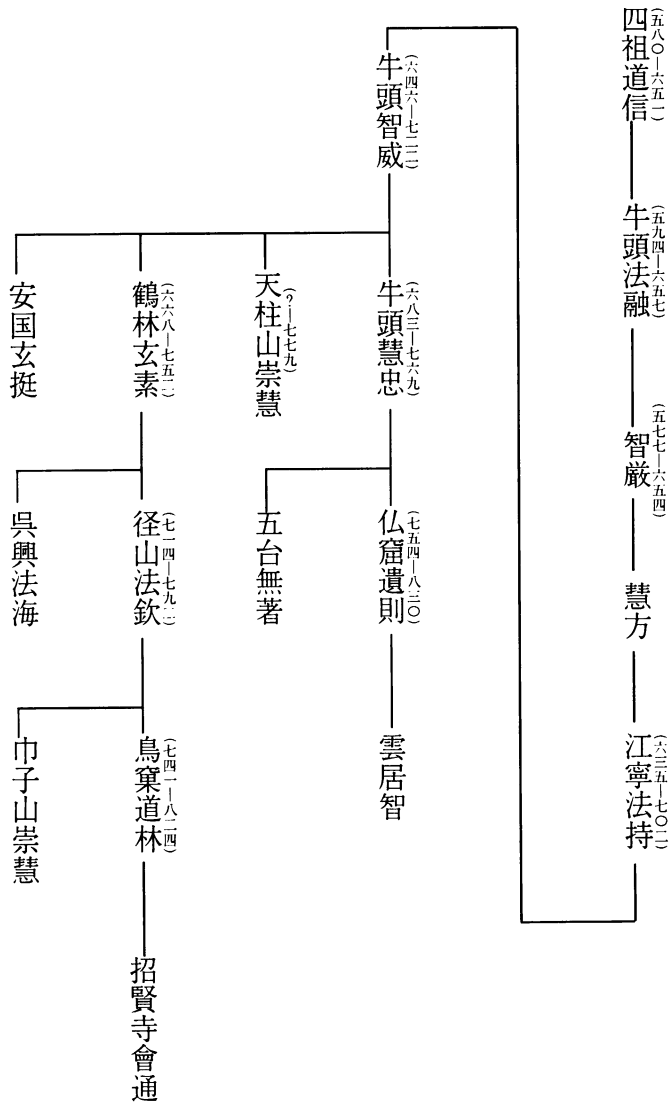
○凝礙<sup>ニ</sup>とどこおつて進まない。凝滯に同じ。但し他に用例が見当らぬ。智異山鐵窟開刊本は「凝礙」に作る。この方が良い。

○宗門<sup>ニ</sup>『祖庭事苑』卷八・雜志の「宗門」の項に次のようにいう、「謂く、三學は此の門を宗とせざるは莫し。故に之を宗門と謂う。正宗記の略に云く、古には禪門を謂いて宗門と爲す。亦た龍木祖師の意のみ。亦た謂く、吾が宗門は乃ち釋迦文一佛教の大宗正趣なり。但だ其の謂う所の意義は衆經に散在し、古今に隱覆し、未だ始めより章<sup>あ</sup>章らかに天下に見<sup>あ</sup>われず。大凡そ其の人にして吾が教に預<sup>か</sup>わる者は、當に盡く此の秘密極證を務とし、乃ち之を正見と爲すべし。涅槃に曰く、我れ今、所有<sup>あ</sup>る無上の正法は悉く以て摩訶迦葉に付囑す、能く汝等の爲に大依止と作らん。是れ豈に而今<sup>い</sup>而後<sup>い</sup>皆な迦葉の無上妙秘密法に依止し、之を正と爲す可きを謂うに非ざらんや。出世の者は乃ち是の妙心密語に據りて以て後の明證と爲す。智度論の若きに曰う、般若波羅蜜は秘密法に非ずとは、其の旨亦た大聖人の遺意は妙秘密法を以て其の教の大宗と爲し、也た世世の三學の者の之を資して其の入道の印驗標正と爲さんと欲するに在り。乃ち知りぬ、古に吾が禪門をして之を宗門と謂い教迹の外に尊ばしむるは、殊に是れなり」(Z 一一三—一一七c)。

「正宗記略」以下は、契嵩の『伝法正宗論』卷下の一部を要略したものである(T 五一—七八—a—二a)。  
○牛頭六祖<sup>ニ</sup>牛頭慧忠(六八三—七六九)のこと。『宋高僧伝』卷一九、『伝灯録』卷四に伝がある。『宗鏡録』卷九八(T 四八—九四五b)にこの人の語が引かれる。

俗姓は王、潤州上元(江蘇省江寧縣)の人。神龍元年(七〇五)、年二十三のとき莊嚴寺に受業す。後に牛頭山の智威禪師の化を慕つて礼謁した。智威は入室を命じ、付法伝灯して山門を委ね、自らは延祚寺に移った。牛頭山に住した慧忠は頭陀行に励むこと四十年、天宝初年(七四二)昇州(江蘇省江寧縣)莊嚴寺に移り、寺の修復を行

い、法堂を建てるや、学徒が雲集した。大暦四年（七六九）六月、坐化す。寿八十七。  
牛頭宗の法系は次のようである。



牛頭宗は神会（六八四―七五八）によって起された南北二宗の論争に刺激され、牛頭慧忠・鶴林玄素の頃に牛頭法融を初祖とする伝灯説を確立した。しかしこの時には、達磨禅の傍系だとする意識はなく、却って南北二宗の外にあつ



て正系としての意識を持っていたと思われる（柳田聖山『初期禅宗史書の研究』第三章参照）。それが『宝林伝』の出現によって、馬祖系を達磨禅の正系とする見方から、牛頭禅は傍系に押しやられ、九世紀に入ると急速に衰えていく。

慧忠系の牛頭禅は、仏窟遺則によって天台山に入り、教禅一致の方向に傾いていく。法眼下三世の永明延寿は師の天台徳韶を通じて牛頭禅に強い関心を示し、彼の著書特に『宗鏡録』は牛頭系の人々の言葉を収録していて、今日牛頭禅を知る上での重要な資料となっている。

牛頭宗では牛頭慧忠が正系であり、玄素は傍系であるが、文献の上で最初にそのことを明記するのは恐らく宗密の『円覚経大疏鈔』卷三之下に、「融遂於牛頭山。息縁忘情。修無相理。當第一祖。智嚴第二。慧方第三。法持第四。智威第五。慧忠第六。智威弟子潤州鶴林寺馬素和上。素弟子勁山道欽和尚相襲。傳此宗旨」（Z一四一―二七九）と言うのが最初であろう。

○徑山國一―鶴林玄素に嗣いだ徑山法欽（七一四―七九二）。国一は代宗より賜わった国師号。

李吉甫（七五八―八一四）の撰した『杭州徑山大覚禅師碑銘并序』（『全唐文』五二二）、『宋高僧伝』卷九が伝記に関する第一資料。『祖堂集』卷三、『伝灯録』卷四、『聯灯会要』卷二等に語句を録す。

師、諱は法欽（一説に道欽）、俗姓は朱氏、吳郡崑山（江蘇省崑山県）の人。身長は六尺とも七尺ともいわれる偉丈夫で、四祖道信―牛頭法融―智嚴―慧方―法持―智威―鶴林寺玄素と相承される牛頭禅を受け、盛大ならしめた。この当時、行脚僧は徑山、馬祖、石頭の間を、盛んに往来したことが、近年の研究で明らかにされている。既にして経史を学び、二十八歳のとき、寶貢（科挙の志願者を地方官が中央に選抜推薦すること）に応じようとして、丹陽（江蘇省鎮江県）を通りかかり、鶴林玄素（六六八―七五二）の盛名を聞き、往いて礼謁した。一見して師資相

いかない、即日に出家する。後、余杭の西山（徑山）に住し、天寶二年（七四三）には、龍泉法甯和尚に就いて具足戒を受けた。大曆の初（七六六、『宋高僧伝』は大曆三年とする）、代宗の詔を受け入内說法し、国一の号と徑山寺の名を贈られた。貞元五年（七八九）、徳宗より璽書がもたらされ、勞をねぎらわれた。六年（『碑銘序』は建中初年とする）、杭州刺史王顔の請により、龍興寺浄院に移る。八年（七九二）壬申十二月順化。春秋七十九、僧夏五十。徳宗より大覚と諡された。（『馬祖の語録』一〇一頁より引用）

牛頭宗でこの法系は傍系に押しやられるが、馬祖系と盛んに交流したのはこの系統であることは、『祖堂集』に於て、牛頭系の人の立伝が、初祖法融を除くと、全てこの系統の人（玄素・法欽・道林）であることから窺われる。慧忠系では盛んに著述をのこすが、この法系は著述をのこさず、より徹底した空觀の立場に立っていたようである。玄素は言う、「吾れ常に黙黙、法として説く可き無し。或るひと信願有つて雙び極まり、心要を懇求し、我に於て渴仰せば、汝に醍醐を施さん。禪定を問うや、吾れ無修と。智慧を問うや、吾れ無得と。道は惟だ心證のみ、言の通ずるに在らず」（『全唐文』三三〇、李華撰「潤州鶴林寺故徑山大師碑銘」）。

九世紀になるとこの法系の禪は急速に衰えるが、その理由は、馬祖に始まる「全体作用」「正法眼蔵」の新しい禪の立場に対して、かたくなに純粹な空觀の立場を守り通したため、時代の波に乗れなかつたためではないだろうか。『臨濟録』に言う、「徑山に五百衆の有り、人の參請するもの少し。黄檗、師をして徑山に到らしめんとす。乃ち師に謂いて曰く、汝彼に到らば作麼生。師云く、某甲彼に到らば、自から方便有り。師、徑山に到る。装腰にして法堂に上り、徑山に見ゆ。徑山、頭を擧ぐるに方あたつて、師便ち喝す。徑山、口を開かんと擬す。師、拂袖して便ち行く。尋いで有る僧、徑山に問う、這の僧は適來什麼の言句有つてか、便ち和尚を喝すや。山云く、這の僧は黄檗の會裡より來たる。你知らんを要すや。自ら他に問取せよ。徑山の五百の衆、太半分散す」（訓註『臨濟録』一九三

頁、其中堂)は、そういった鶴林玄素の禪の末期的あり方を示しているであろう。

○無名禪師〓七二二—七九三。法を荷沢神会に承く。『宋高僧伝』一七、『広清涼伝』下に伝を録す。『宋高僧伝』に次のように言う。

釋無名、姓は高氏、渤海の人なり。祖は今の西京に宦たりて、乃ち洛陽の人と爲る。冲孺の齡、舉措卓異、口は辛血を噴ず、性は誼譚に狎まず、邈矣に塵を出ゆ、故に(俗に)留滯り難し。年二十八にして瘦雁の籠を出づるが若く、師に投じて習學し、依り隨いて同徳寺に隸く。律藏を精にするに及んで一字を解して以て疑なし。禪宗有るを聞き、千里なれども決を請わんと思ひ、舉領整裘、肩を開き路を見る。辭飛ぶがごとく筆に健れ、思い湧泉の若くす。因りて師に隨いて遊方し、祖師の遺跡を訪ひ、「(神)會師の心印を付授するを得たり。會は先に諸徒に語つて曰く、「吾の付法は名字有る無し」と。因りて無名と號す。此れ自り志て四方を歴て五嶽に周遊し、羅浮・廬阜・雙峯・峴公・鑪嶺・牛頭・剡溪・若耶・天台・四明、詢問わざるは罔し。風格は高遠にして神操は朗澈たり。博識の者は貌を覩て便ち伏す。僻見の者は發言すれば必ず摧かる。時に徳宗、方に鮮于叔明・令狐峒の僧尼を料簡る事を納れんとす。時に〔無〕名、表有つて直諫して並な停む。尋時鮮于叔明・令狐峒は南海の百姓に流さる。貞元六年(七九〇)に至り、往きて五台に遊び、居に定所無し。九年(七九三)十二月十二日、佛光寺に於て、先に食し訖り、儼然と坐化す。春秋七十二、臘は四十三。十一年(七九五)闍維して舍利一升を獲る。澤潞節度使の李抱眞、塔を佛光寺に建つ。貞元六年庚午の歳なり。或ひと云く、「〔無〕名は疏を著わし、彌陀經を解くす、と。(T五〇—八一七a)

○東都同徳寺〓未詳。

○函丈〓一丈の間をあけて対座すること。弟子の礼をとつて教えを受ける意。『礼記』曲礼上、「若し飲食の客に非

ざれば、則ち席を布くに席間丈を函る」。『伝灯録』卷一六・大光居誨章、「潭州大光山居誨禪師は、京兆人なり。姓は王氏。初めて石霜の室に造り、函丈して請益し、二載を経たり」（T五一一三二八c）。

○心要一章＝「答順宗心要法門」といわれる。『景德伝灯録』卷三〇には「五台山鎮国大師澄観答皇太子心要」と題され、『全唐文』九一九には「答皇太子問心要書」として収録されている。また圭峰宗密の註である『華嚴心要法門註』（Z一〇三）がある。凝然『法界義鏡』上という、「華嚴心要觀一卷。清涼師撰。大唐第二十代主順宗皇帝。在春宮位之時。貞元十一年乙亥〔當日本國延暦十四年〕。問心法於清涼大師。大師即答彼所問。作心要一卷。陳一乘心道。直指法體。正顯自心。見即成觀。解即滿行。寔爲學者之精要。行人之秘術者」（『大日本仏教全書』一三一—二八一下）。

「至道本乎其心、心法本乎無住」はその冒頭の二句。

○祖燈録＝『角虎集』卷上・万松行秀禪師章にいう、「師は三たび藏教を閲し、旁ら百家に通ず。恒に淨土法門を修し、祖燈録六十二卷を編す。又た淨土書若干を撰し、以て人の念佛の疑を斷ず」（Z一〇九—二六四b）とあり、また『五灯全書』卷六一・行秀章（Z一三九—一五二a）にも『祖灯録』の著作があったことを伝える。

行秀（一一六六—一二四六）は曹洞宗の人。宏智正覺の「頌古百則」を提唱した『従容録』、同じく宏智の「頌古百則」を評唱した『請益録』の著者として知られ、その法嗣に湛然居士耶律楚材、『鳴道集』を著した李屏山、『空谷集』、『虚堂集』を著した林泉從倫がいる。その『空谷集』卷三・第三八則にも次のようにいう、「今此の頌古中、黄龍の問いを作すに、兼ねて垂藤を垂條に作る。蓋し當時の編録の詳ならざるなり。今祖燈録を以て證と爲す」（Z一七—二八七c）と見える。

○出典について＝『祖燈録』と明記される。しかし現在に伝存していない。